

つなげよう！世界のみんなとわたしたち
第三回開発教育/国際理解教育コンクール

スマイルキッズプロジェクト

～世界とつながった、わたしたちの教室～

平成18年9月1日

北海道上ノ国町立小砂子小学校

教諭 黒川 貴功

目次

1. はじめに	1
2. カリキュラム案	1
(1) 実践の趣旨、根拠	1
(2) 指導上の留意点	2
(3) 指導計画	4
3. 授業実践の詳細	6
(1) エジプトの生活について知ろう	6
(2) 自分たちの生活と世界の関わり、エジプトとの関わり	7
(3) 世界の国々と日本との関わりを知ろう	7
(4) JICA 出前講座の実施	8
(5) 世界の子どもたちの現状を知ろう	9
(6) 自分たちにできることを考えよう	10
(7) エジプトのストリートチルドレンの保護施設にとの交流をしよう	10
(8) 世界の友達へ贈り物を贈ろう	12
(9) 活動を振り返ろう	14
4. 成果と課題	14
5. 終わりに	15
6. 参考文献、資料	15

* 北海道新聞に本校の実践が紹介された記事

スマイルキッズプロジェクト

～世界とつながった、わたしたちの教室～

氏 名：教諭 黒川 貴功

実践教科（時間数）：総合的な学習 75時間

対象生徒・学年（人数）：上ノ国町立小砂子小学校 3～6年生 11人

実施日時：平成16年2月～平成18年現在

1. はじめに

平成17年1月に JICA 札幌による教師海外研修に参加し、エジプトでの国際協力活動について視察した。現地で活躍する協力隊員と交流し、活動の内容や実情、課題などについて説明していただいた。

以前から国際理解教育の実践を行っていたので、教師海外研修では現地で活躍する協力隊員と知り合い、その後の教育実践に協力していただこうと考えていた。その中で児童と交流するのにもっとも適した施設として、ストリートチルドレン保護施設を選択した。

これまでの約2年間の実践をまとめたが、現在進行中の実践や計画段階の活動もある。

2. カリキュラム案

(1) 実践の趣旨・根拠

以前の国際理解教育の実践

本校では数年来、国際理解教育を実践してきているが、これまでは先進国中心の異文化理解や英会話活動が中心であった。そこで、開発途上国にも目を向けさせ、先進国に偏らない国際感覚を身につけさせたいと考えた。そこで、教師海外研修で教師自身が直接ふれた題材や資料をもとに、授業を行った。

本校児童の実態

世界中の現状や事件についてテレビや新聞などで報道され、児童も関心を持って見ている。しかし、それらはどこにあるのかもよく知らない遠く離れた外国の話で、現実として受け止

めることが児童の発達段階ではなかなか難しい。そこで、実際に世界の人々（同世代の子供たち）との交流活動を行いながら、「自分たちが世界とつながっていること」に気づかせ、「世界とどうつながっていくのか」を考えさせることを目的とした。

最後には児童の意見を元に、自分たちにできることを考えさせ、何らかのボランティアなどの実践を取り入れていきたい。そのために、児童主体で話し合いをして、意見をまとめ、行動に移す、という一連の活動をカリキュラムに盛り込んでいく。

学習指導要領との趣旨を受けて

小学校学習指導要領「総則」の中で、総合的な学習のねらいについて、「(2) 学び方やものの考え方を身につけ、問題解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」と書かれてある。「自分が世界とどのようなつながり、関わっていくのか」を考えてさらに実践していくことは、「自己の生き方を考える」こと、つまり「生きる力」を育てることにつながる。

本実践の目標

- ・外国人や外国の文化と楽しく触れ合い、外国文化に慣れ親しむとともに興味・関心を高め、視野を広める。
- ・外国人との交流を通して世界中の人と仲良くしようとする態度を育てる。
- ・世界の人びとと自分との関わりについて考え、行動しようとする態度を育てる。

(2) 指導上の留意点

児童に現実問題として考えさせ、考えをより深いものにするために、以下のことに注意してきた。児童の発達段階や知識量を十分に考慮し、児童の自由な発想や考察を促すことが目的である。

児童と同世代であること

児童にとってそれらの話が「見知らぬ国で起きている、自分たちとは関係のない話」とならないために、同世代の子供を題材として取り上げた。自分と同じあるいは近い歳であれば、それがまるで隣の席の友達のように感じられるのである。

自分との関わりを意識させる

世界の国と国が関わりあっていることを、世界の人と人が関わっていることへと関連づける。彼らが貧しいことの原因はもしかしたら先進国のせいかもしれない、子供たちが働いて作ったものが安く日本に入っているかもしれない、それを自分たちが買っているのかもしれない、ということ意識させる。そうすることで、ビデオの中の話がより現実的に児童の感情や思考を揺さぶる。

国を意識させすぎない

「日本では～で、エジプトは～」というように、1つの国をひとまとめに考えると、場合によってはその国への先入観となってしまうこともある。また、自国と他国、日本人と外国人というような閉鎖的な国際感覚になってしまう可能性もある。「エジプトがストリートチルドレンだらけというわけじゃないよ」「この国以外にもストリートチルドレンはたくさんいるよ」というような声かけが必要である。人の生活と宗教や歴史、国家などとの関わりは小学生には難しいので、中学校、高校でそれらを学習した時に、この勉強を振り返ってもう一度考えてみればいいのである。「国を見ずに人を見る」ことが大切である。

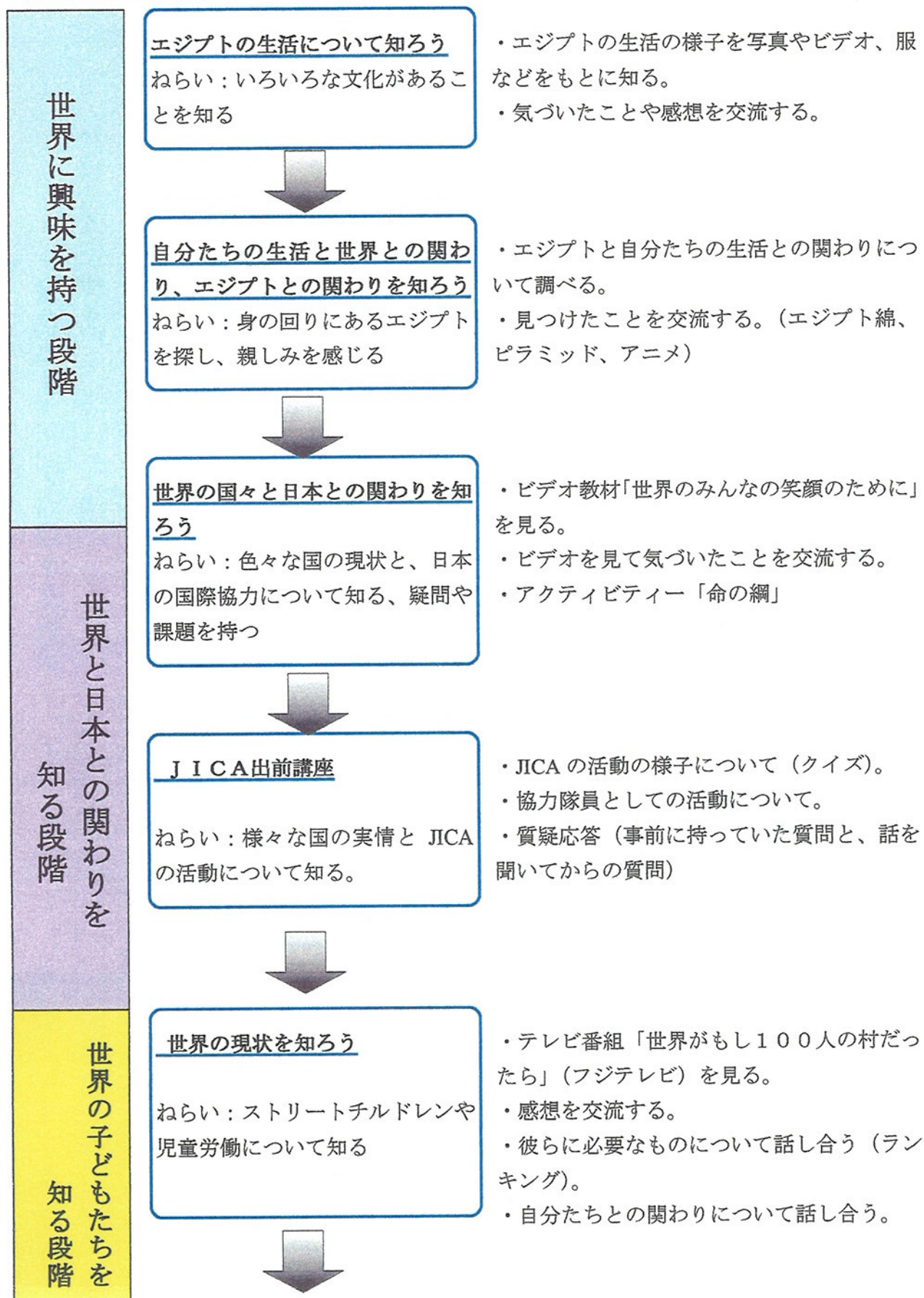
表現能力を身につける

開発教育の活動には、話し合いや交流、発表など、表現力を必要とするものが多い。それは、他教科（特に国語科）の中にも意識的に取り入れ、テクニックとして身につけておかなくてはならない。そうすることで、話し合いは効果的に進み、お互いに考えを深め合うことができるのである。

活動の輪を学校の外(地域)へも

学校の中だけでの活動になってしまうと、活動に広がり少なく、児童の視野も狭くなってしまいがちである。地域や家庭に向けて発信することで、児童は気持ちを引き締め直す。「なぜ?」「何をするの?」など、いろいろな質問に答えていかななくてはならず、児童も責任感が高まる。また、活動を成功させた時の達成感も大きくなり、それを地域や家庭と共有できるのである。

(3) 指導計画



自分たちにできることを考えよう
ねらい：自分たちにできることについて具体的な計画を立てる

スマイルキッズプロジェクト

- ・自分たちにできることを話し合い、具体的な計画を立てる。
- ・使用済み切手、テレカ、書き損じ葉書集め。
- ・古本、CD、ゲームカセットなどの収集と換金。

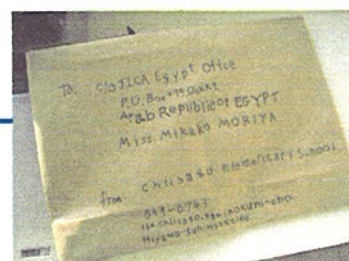
エジプトのストリートチルドレンの保護施設と交流しよう

ねらい：世界の子供たちとどう関わるかを話し合い、実行する。

- ・世界の子供達と友達になる方法を考える。
- ・「ストリートチルドレン」との交流。
(エジプトの T-Center)
- ・ストリートチルドレンや保護施設についての課題や疑問を送る。
- ・絵や手紙を通しての交流を行う。

世界の友達へ贈り物を送ろう

ねらい：自分たちにできる国際協方法を実行する。



Tセンターにビデオレターを送ろう
日本の文化を届けよう

スマトラ島の津波の被災地の子供に、
励ましの気持ちを伝えよう

使用済み切手、書き損じはがきを集めて、国際医療援助団体に送ろう

*現在、2回目のビデオレターを作成中（以下は予定）

活動を振り返ろう

ねらい：これまでの活動を振り返り、日常生活の中でできる国際協力を考える

- ・これまでの活動の振り返りと感想の交流。
- ・自分たちの日常生活への実践方法の交流。
- ・新聞や作文、ホームページに成果をまとめて発表会を行う。

3. 授業実践の詳細

(1) エジプトの生活について知ろう

エジプトの文化や生活、風景などを写真やビデオ映像を元に紹介した。自分たちの生活と違っていること、似ていること、楽しいこと、おいしいこと、驚かされることなど。途中、クイズも交え、お土産を景品としてプレゼントするとさらに盛り上がった。お土産に買ったエジプトの衣装（ガラベヤ）がとてもきれいなので好評だったが、男物でもワンピースのような形なので、男子は着るのをためらっていた。ホームステイ先からもらった



ハイビスカスティーは梅干しの汁のような味だったが、以外にも好評だった。スポーツ新聞を買って帰ったが、記事にイギリスのベッカム選手やロシアのシャラポフ選手が載っていたので、エジプトの人も日本人と同じようなことに興味を持っていて、そのことに親近感を感じていた。

エジプトについて詳しく知る機会がこれまで少なかった児童に途上国のイメージを強調しすぎると、それは偏った固定観念になる可能性がある。そこで、エジプトやイスラム圏の興味がわく内容を多く紹介した。

<児童の感想>

- ・エジプトの人はみんな仲良しで、優しい感じがした。
- ・肉屋に牛の頭がぶら下がっていておもしろかった。
- ・ピラミッドは一つだと思ったら三つあってびっくりした。
- ・ウサギや鳩のほかに人が食べる動物は何ですか？
- ・女の人が外に出るとき頭にタオルのようなものを巻くことが「へえ～」と思った。
- ・市場にいた動物はペット用だと思ったら、食べるためだと聞いてびっくりした。
- ・店の品物に値段が付いていなくて、話し合いで値段が変わるのがおもしろい。やってみたい。
- ・エジプトのことをピラミッドくらいしか知らなかったけどおもしろそう。行ってみたいと思った。

地域住民向けの国際理解教室

別の機会に地域の住人にも報告会を行い、エジプトでの JICA の活動について紹介した。普段知ることのできない日本の国際協力について興味を持って聞いていた。ハイビスカスティーは大好評で、ガラベヤが気に入ったお年寄りもいて、順番に試着した。

ストリートチルドレンについてある老人が「満州から引き上げる時に駅の周辺にたくさんいた。一人でも連れて帰りたかったが、できなかった」と思い出を話してくださった。



(2) 自分たちの生活と世界との関わり、エジプトとの関わり

身の回りにあるエジプトと関わりのあるものを探す活動を行った。新聞記事の中で探したり、図鑑で調べたりした。「エジプト綿」という言葉を下着の広告で見つけ、エジプトで撮った綿花の山の写真を見せ、それらが製品となって自分たちのところまで運ばれてくることを想像した。他にはモロヘイヤが見つかった。あまり見つからなかったが、エジプトと自分たちの生活のつながりをイメージすることができた。

(3) 世界の国々と日本との関わりを知ろう

児童は、自分たちと違う生活や文化への興味が高まり、色々な国について知りたがった。これまでは、エジプトの開発途上国の側面にはあまりふれなかったもので、世界の中には援助を必要とする人たちがいることについて、ビデオ教材を通して知らせた。同時に、日本が様々な国に技術や資金を援助していることを紹介した。カンボジアやベトナムの暮らしや、そこで活動する協力隊員について、児童は興味を持ち、「協力隊員として活動してみたい」「自分にできることを増やしたい」というような意見が多く出た。

これまでの学習ではエジプトと自分たちの生活の関わりを調べたことを受けて、ビデオの中でも触れられている、日本が戦後世界の国々の援助で国を立て直したことや、様々な国との関わりの中で現在の日本の豊かな生活があることを、アクティビティー「命の綱」を行いながら考え話し合った。特に国名は挙げずに先進工業国、資源産出国、開発途上国、農業国などを役割分担して、それぞれの関係を考えて。

また、JICA についても知識はほとんどなかったが、ビデオを通してそのおおよそが分かり、協力隊員や JICA のスタッフと会って色々質問したいという意見が出た。そこで、JICA の国際協力推進員に、出前講座を依頼することとなった。また、協力隊 OG にも来校していただき、お話をもらえることとなった。



(4) JICA出前講座の実施)

児童は世界の情勢や日本の国際支援について興味を持つようになったので、JICA の国際協力推進委員を学校に招待して児童と交流していただいた。自分たちの知らないところでたくさんの日本人が国際協力のために活動していることを知ってもらいたかった。

JICA の国際協力推進員がはじめに JICA の活動の概要や世界の様子について、クイズも交えながら説明してくださった。また、協力隊 OG もエジプトと同じイスラム圏のヨルダンでの活動してきたことを説明してくださった。その後、児童は説明してもらったことへの質問や、ビデオを見たときの疑問、要望などをぶつけた。お二人は丁寧に答えてくださったので、児童は安心して正直な質問をたくさんした。

世界中で活躍する日本人の話聞いて、児童も誇らしい気持ちになっていた。「自分も協力隊員になりたい」「自分たちにもできることがあるかも」と考えるようになっていた。



<児童からの質問>

- ・ JICA の仕事はなんですか？
- ・ JICA に入ったのはなぜですか？
- ・ どんなふうに寄付ができますか？
- ・ 一番（特に）困っている国はどこですか？
- ・ 日本以外にも、困った国に援助している国はあるんですか？
- ・ 協力隊員はどこの国で何人くらい、どんな活動をしているんですか？
- ・ 他の国（カンボジアなど）の人と仲良くなるために手紙や絵を送りたいのですが。



(ポーランドの衣装に挑戦)

<児童の感想>

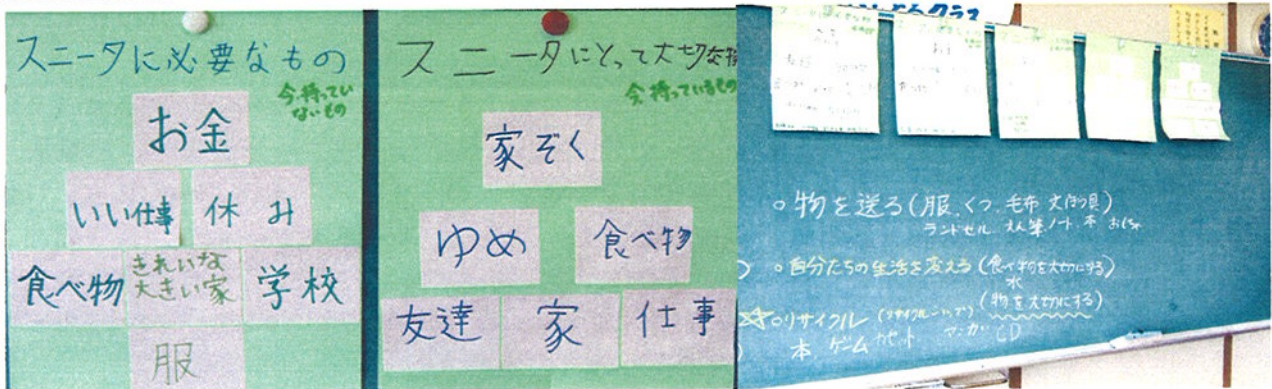
- ・ JICA の人に聞いて世界の人に手紙や絵を送りたい。
- ・ 世界には学校に行けない人がいっぱいいると聞いて、やっぱりな～と思った。
- ・ 自分たちにできることがあればいいなあとと思った。使用済み切手集めも役立つとわかって、前もやっていたのでまたやりたい。
- ・ ぼくも JICA の人のように世界の人たちのことを考えてあげられるようになりたい。
- ・ 私たちが当たり前に残している給食のパンは、食べ物がない人たちにとっては大切なものなんだと思った。
- ・ ぼくは意見が違うだけでどうして戦争をするのかなと思った。

(5) 世界の子供たちの現状を知ろう

世界中で困っている人、支援を必要とする人がたくさんいることは理解できたが、まだ現実的にとらえることは難しいようだった。そこで、自分たちと同世代の子どもたちの現状について紹介したテレビ番組を見せた。(フジテレビで2004年8月7日と2005年5月14日に放送されたドキュメンタリー「世界がもし100人の村だったら」)



1日10時間も絨毯を織る少女、極寒の町のストリートチルドレン、債務奴隷として一生働くことが運命づけられた少女などを取り上げ、彼らにとって大切なもの、必要なものなどを「ランキング」を通して交流した。生きる術「お金」や「食べ物」などに注目した班、安らぎや平穏のために「家族」や「家」、「自由な時間」を重視した班、未来を見据えて「学校」や「夢」を上位に持っていた班など、様々な視点から意見が出された。(地域の方にも活動の様子を見てもらった)



児童は「自分たちに何ができるか」を考えるようになり、はじめは「募金」「品物を送る」などが出されたが、「手紙を送って友達になる」「絵を送って元気づけてあげたい」というようなアイデアも出されるようになった。「募金をするのもいいが、親にもらったお金じゃ意味がない」という意見が出され、自分たちにできる援助を考え始めた。

<ストリートチルドレンのビデオを見た感想>

- ・ どうしてみんなでストリートチルドレンを助けてあげないんだろう？
- ・ ストリートチルドレンを保護する施設はないのかな？
- ・ どうして自分の子供に働けと言ったり、家から追い出したりするんだろう？
- ・ 親に「働きなさい」と言われても、親は親だから大切だと思う。
- ・ もし自分がストリートチルドレンだったら死んでるかもしれない、そう思ったら怖くなった。

<児童労働のビデオを見た感想>

- ・ 仕事はつらくないと言ったけど、慣れているからだと思う。
- ・ 毎日忙しくても家族を大切にしているのがいいなと思った。
- ・ 毎日どんな気持ちで働いているんだろう。
- ・ やっぱり私のお金を少し分けてあげたい。

(6) 自分たちにできることを考えよう

ストリートチルドレンや児童労働に対して自分たちにもできる国際協力やボランティアについて話し合った。まず、それらの原因や背景について彼らなりの視点から考え、自分たちとの彼らとの関わりについて考え、ここにおいて自分たちの力でできることを探した。

その結果、2年前から行っている「使用済み切手、テレカ、書き損じ葉書集め」を続けていくことと、募金でなく古本や不要なCDなどをリサイクルショップに買い取ってもらって募金を行うことが決まった。そのために、まず、児童の家から不要な本やCDなどを集めた。その後、地域の人たちにも声かけをして回収作業を行った。その結果、数千円を得ることができた。

また、自分たちの無駄の多い生活を振り返り、「食べ物や水を大切に」「ものを大切に」することも国際協力になるだろうと考えることができた。



このように、自分たちの力で計画実行し、国際協力やボランティアのお手伝いをしたり、世界の子どもたちと友達になる活動を「スマイルキッズプロジェクト」と名付けた。

(7) エジプトのストリートチルドレンの保護施設と交流しよう

児童が「手紙を送って友達になる」「絵を送って元気づけてあげたい」と言っていたことを受けて、JICA スタッフの方々と相談していくつかの施設を紹介してもらった。海外研修の際に訪問したカイロのT-Center（ストリートチルドレン保護施設）と連絡を取り、手紙や絵を送らせてもらうことになった。それが、スマイルキッズプロジェクト最初の活動であった。



<1回目に送った絵>

手紙に何を書いているのか分からずに戸惑う児童もいたが、「自分たちの生活や周りの風景、普段の遊びや勉強について紹介することから始めよう」という話でまとまった。学校の様子、遊び、地域の風景、エジプトに雪は降らないと考えてスキー学習の様子、七夕や節分などの季節行事の様子などを送った。

「アッサラームアレイコム(こんにちは)」とアラビア語で書いたことが、センターの子どもたちには大評判であったそうだ。



Tセンターで活動している青年海外協力隊員からメールに添付された写真が届いた。Tセンターで本校の児童の描いた絵が紹介されている授業の様子を写した写真であった。エジプトに届くことは当たり前であるが、児童にとっては「本当に届いたんだ!」と感動していた。教室と世界が現実の中でつながり、児童がそれを実感できた瞬間であった。

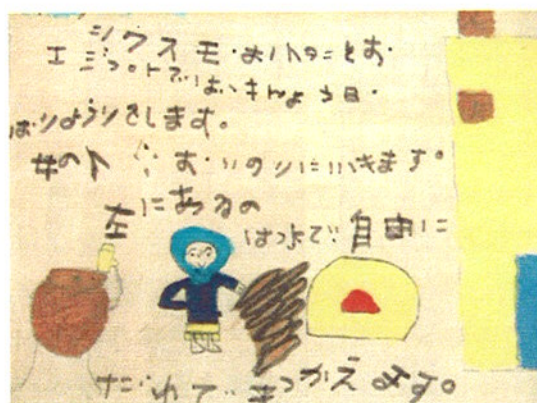
<届いた絵を紹介している様子>



< 2回目の絵が届いた様子 >

2回目はエジプトのことを本やインターネットで調べて、エジプトの様子を絵に描いた。例えば、ピラミッドなどの遺跡、アエシ（パン）を焼く様子、女性の服装、エジプト人と日本人が手を取り合っている様子など。その絵を受け取った時に、自分たちの親しみの気持ちや友達になりたいという願い、分かり合いたいという思いが伝わってほしいと、児童は考えるようになっていた。単語や簡単な言葉はできるだけアラビア語で書いた。

（JICA 国際協力推進員の協力）

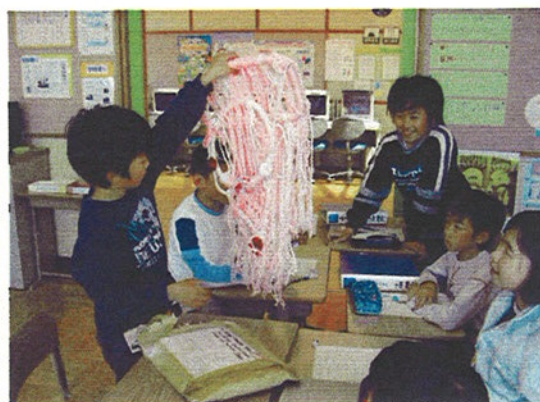


絵が届くとすぐに T センターのスタッフである協力隊委員から E メールで授業の様子を撮った写真が送られてくる。それを見るたびに児童は大喜びで、自分たちと世界がつながったことを実感することができた。

2回目に本校の児童が積極的にアラビア語を使ったことが、Tセンターの子どもたちやスタッフに大好評で、10枚以上の返事の手紙には、たくさんの日本語が書かれてあった。しかも、パピルスに書かれてあった。慣れない日本語を一生懸命に書いたことがすぐに感じ取れ、児童も感動していた。その文字を読みとることはなかなか難しく、悪戦苦闘していた。「私たちの書いたアラビア語も、きっとこんなふうに読みにくかったのかな」「でも、何とか読めるよね」と言っていた。



児童が必死に変形した日本語を読み、理解できた時に見せる笑顔に、国際理解教育の実践の一つの成果を見いだした。お互いがお互いの文化を認め合い、挑戦し、苦心した後に分かり合うことで、本当の国際理解は、なし得るのではないだろうか。



Tセンターで行われている職業訓練で作った壁掛けの大きな飾りが入っていた。一本一本丁寧に編んで作られていた。初め、児童は何に使うのか分からずに、みんなで話し合っていた。一人の児童はカツラのようにかぶって遊んでいた。教室の壁に掛けると、何ともすてきな飾りだった。

(8) 世界の友達へ贈り物を送ろう

古本や中古CDをリサイクルしてできたお金でTセンターの子どもたちに贈り物をしたいのだが、何を送ればいいか児童は悩んでいた。Tセンターのスタッフとメールで相談したところ、どんな物でも受け入れてくれるということなので、日本的なもの、楽しく体験してもらえるもの、送ることができるもの、高価でないものなどの条件を出し合い、「習字セット」を送ることと決まった。「習字セット」と言っても、筆と墨汁と習字紙だけである。

そこでまたアラビア語のできる JICA の国際協力推進員に協力してもらって、アラビア語のメッセージを書き初め用の大きな紙に半分は日本語で、半分はアラビア語で書いて送った。何度もやり直しをしながら、みんなで協力して書き上げることができた。

さらに、毛筆の書き方を説明したビデオも同封した。それぞれの道具の名前や使い方を丁寧に紹介した。

併せて、地域の様子について紹介するビデオも撮影した。ちょうど雪が降っている時で、雪合戦など

をして遊んでいる様子を撮影した。また、漁師町なので、漁港で水揚げしている様子や1年間に捕れる魚なども説明した。普段の自分たちの生活の様子を知ってもらおうと、校舎の中や勉強の様子なども案内しながら説明した。

ビデオ撮影にはずいぶん時間がかかったので、児童も達成感があったようだった。

エジプトで使われているビデオの方式に JICA 札幌で変換してもらって送った。



Tセンターにそれらの贈り物が届くと、すぐにお礼のメールが届いた。早速、毛筆に挑戦して、作品を作っていた。

Tセンターの子どもたちもスタッフも（特に施設長）大変感激してくださったようだった。施設長は何とか双方の児童を実際に会わせて交流する方法はないかと提案してくださった。残年ながら現在その目途は立っていないが、児童にとってよい励みとなった。



現在進行中の実践

次に児童が考えたスマイルキッズプロジェクトの活動は、音楽の交流である。自分たちが音楽で使っているリコーダーをプレゼントして、日本の歌に挑戦してもらおうというアイデアだ。

リコーダーで吹ける音階の曲で、ジャープアやフラットが少ない曲、簡単なメロディーでなおかつ、自分たちになじみの深い歌、あるいは日本のイメージの歌を探した。様々な意見が出たが、「春の小川」「おぼろ月夜」「ふるさと」の3曲に決まった。班に分かれて、それぞれ練習をしている。練習が終わったら、ビデオ撮影に入る。その曲の吹き方だけでなく、リコーダーの使い方から丁寧に説明するつもりである。

<スマトラ島の津波被災地の子どもたちへ>

世界のニュースに児童は興味を持つようになり、スマトラ島沖の地震による津波被害を受けた地域にも目を向けていた。ちょうどそのころ、JICA の国際協力推進員からインドネシアの津波被害を受けた子どもたちと絵の交流ができるという情報を得て、本校の児童も「絵



を送りたい」と言い出した。では、何を描けばいいのか、みんなで話し合い、「励ます絵のメッセージ」「未来を表す絵」「今ががんばっている様子」「昔のきれいだった町」などの意見が出た。実際にインドネシアの風景がどんなものか知っている児童はいなかったもので、本などで調べて、描いた。会ったこともない人のために、児童は本当に一生懸命描いていた。きっと彼らの思いは、被災地の子どもたちに通じるであろう。

<使用済み切手や書き損じはがきの回収>

全くお金をかけないで自分たちの力だけでできる国際ボランティアはないかと探して、2年前から使用済み切手や書き損じはがきなどを集めていた。以前は引き受けてくれていた国際ボランティア団体が、それらの受け入れを取り止めたので、ほかの団体を探すことに苦労していた。そして見つけたのが、社団法人 日本キリスト教海外医療協力会。開発途上国の医療援助を行っている団体だそうだ。そこであればスマイルキッズプロジェクトの趣旨にもあっているので、そこに送ることにした。



回収は児童の家庭と近所の家、地域の福祉センターにも回収箱を置かせてもらった。小さな地域であったが、意欲的に集めた結果、かなり集まった。本校児童が使用済み切手などを集めていることを聞きつけた教育委員会の方も協力して下さった。

日本キリスト教海外医療協力会からすぐに礼状が届き、児童は、ほんの少しであるが困っている人の助けになってことがうれしいようだった。

様々な活動を通して、児童は活動への意欲を高めていった。また、自分たちで考えて行動することの大変さとおもしろさを感じていた。中にはあまり積極でなかった児童もいたが、活動や交流を進めるに連れて、「自分のしたことが誰かの役に立っている」と実感できるようになり、「がんばろうかな」と思うようになった。

(9) 活動を振り返ろう

これまでの活動を通して感じたことや考えたことを交流する。児童によって感じ方や思いはそれぞれ違っている。これまでの話し合いや活動でもそれを感じてきたと思うので、改めてお互いの考え方の違いについて話し合い、そのちがいを認め合う気持ちを持たせる。国際理解のもっとも難しい点は、人によって違う考えを認め合い、理解しようとする態度であると考えからである。

また、自分たちの普段の生活の中でできる国際協力について話し合う。そうすることで、一時的でイベント的な国際協力に終わらないようにする。(例えば、食べ物を大切にする、ものを買うときに生産国を見る、世界のニュースを見る、など) そうすることで、自らの生き方についても考えることができ、総合的な学習としての目的である「生きる力」を身につけることができる。

全ての活動が終わった段階で、作文やホームページなどにまとめて、発表会を行う。地域住民にも参加を促し、児童の考えを学校の外にも広げていく予定である。

<国際理解・国際協力のための作文コンテストで最高賞受賞>

本校の児童は北海道国際連合協会主催の国際理解・国際協力のための作文コンテストで2年連続で特賞をいただいた。そのほかにも多くの賞をいただいた。

児童はスマイルキッズプロジェクトなどの総合的な学習で行ってきた学習や活動をまとめ、発表したものである。札幌まで招待されて朗読する機会を与えられ、児童も大変誇らしげであった。他の児童の大きな励みとなっていた。



4. 成果と課題

児童は話し合い活動を通して考えを深め、行動を起こすところまでできた。しかし、それが「生きる力」がついたとすることは難しい。日常生活の中で「自分にできることはないかな？」という気持ちを持ち込ませたい。そこまでいってこそ目標が達成できたと言える。そのためには年間を通して、開発途上国について考える機会を設け、継続的に支援のための活動を行っていかなくてはならない。その際に課題となるのが、カリキュラムの作成である。

今後さらに様々な国や地域の人々との交流し、視野を広げていかなくてはならない。途上国のマイナス面ばかりでなく、明るく楽しい文化や生活などを効果的に織りまぜ、偏った国際感覚にならないように配慮することが必要だと感じた。限られた授業数の中でどのような授業計画をたてるか、内容をどのように整理し、他教科との系統性を持たせるかが課題である。

絵や手紙、ビデオレターなどを通して今後とも、途上国の子供たちとの交流活動を行ってきたい。児童も大変意欲的であるが、何のために交流活動を行うかを考えさせたい。それは児童に個人によって様々であるが、それぞれに考えをしっかりと持たせなければ、その意味を失い

かねない。「友達になりたい」「力になりたい、励ましたい」「考えを交流したい」などが、現時点で本校に児童が考えている交流の目的である。

児童は途上国の現状を知って、何かをしてあげたいという気持ちを強く持つ。その気持ちは大人からみれば、短絡的で、一方的だと感じることもある。「使いかけの鉛筆やノートがたくさんあるからあげたい」というようなものである。しかし、それは児童が許される自由の範囲で考えた、精一杯の支援の気持ちであると感じた。教師はそれを否定するのではなく、見守らなくてはならない。その後、中学生、高校生になっていったときにもう一度このような考えを振り返り、反省したり考えを改めたりするであろう。教師は児童の自由な発想を妨げず、教師の価値観を押しつけないよう、配慮したい。

5. 終わりに

国際理解教育・開発教育の方法やねらいは、対象となる児童生徒の発達段階や地域性などから、まさに千差万別である。英語を小学校で必修化しようという考えもある。むしろもう一度日本を見直そうという動きも強くなってきている現在の教育。それぞれ意味があり、それぞれのねらいや目標に合致した成果が期待できる。

本校では前述のような実践を行ってきたが、すべての点において十分な成果を上げられたとは言い難い。今後も様々な場面で児童に国際感覚を身につけさせたいと考える。教師からの押しつけでなく、自分たちの中から導き出された国際感覚である必要がある。

十分な成果はほど遠いかもしれないが、間違いなく児童は国際感覚を身につけつつあるのも事実である。世界のニュースにも敏感になり、外国から来る品物（特に食べもの）にも関心が高まっている。今後も彼らの国際感覚が広がり高まっていくのを支援し、見守っていきたいと考える。

音楽の時間に「世界中の子供たちが」という歌を全校児童で歌っている。「世界中の子供たちが一度に笑ったら～」、「世界中の子供たちが一度に泣いたら～」「広げようぼくらの夢を」「届けようぼくらの声を」「世界に虹をかけよう」という歌詞がある。開発教育の実践を進めるうちに、子供たちはその歌詞の意味を考えながら歌っている。世界中の子供たちに、本校の子供たちの声を届けるお手伝いを、今後も続けていきたい。

6. 参考文献、資料

- ・ビデオ「世界の子どもの笑顔のために」国際協力プラザ
- ・「世界がもし100人の村だったら1, 2」フジテレビ2004年8月7日、2005年5月14日放送
- ・『開発教育・国際理解教育ハンドブック』財団法人国際協力推進協会
- ・『わくわく開発教育～参加型学習へのヒント～』開発教育協議会
- ・『いきいき開発教育～総合学習に向けたカリキュラムと教材～』開発教育協議会

小砂子小にカイロの貧しい子から返事

カイロの子供たちから絵手紙の返事が届き、大喜びの児童たち



【上ノ国】町立小砂子小 大和田正人校長、児童数十四人の三十八年生十一人が、エジプト・カイロでの保護施設に絵手紙を送り、このほど返事が届いた。同施設の授業で活用された様子を撮影した写真や絵手紙などを見た児童たちは大喜びで、今度はビデオレターなどを送ろうと準備。世界の子供たちの苦しい現実を知り、自分たちでもできることは何かと始めた交流が本格化した。

(中島 威)

「私たちの国にも漁港」 絵手紙や写真に大喜び

同小では町内の英語指導助手(AET)との交流をきっかけに、国外の話題に目を向けるようになった。総合的な学習の時間を使って二〇〇三年度から、経済的な理由などから路上で生活する世界のストリートチルドンについて学んでいる。昨年一月、同小教諭の黒川貴功さん(三十七)が国際協力機構(JICA)主催の海外派遣研修で、三歳から十九歳までのスト

リートチルドンを保護するエジプトの施設を訪ねた。帰国後、児童たちに同施設との交流を呼びかけた。昨十一月、現地のJICAを通じて小砂子地区の学校の目の前にある漁船が停泊した港の写真や絵手紙を送った。

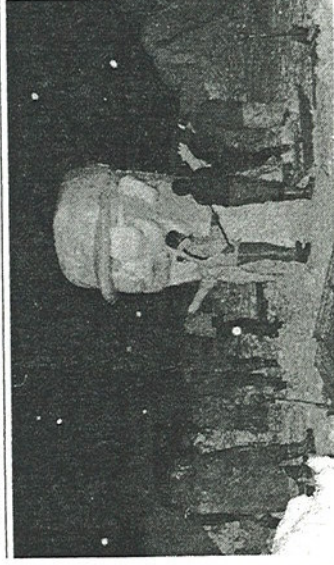
上ノ国

一月末、同施設からビデオレターが届いた。絵手紙四通とポストカードのほか、現地の子供たちが勉強している写真などが入った返事が届いた。「皆さんと友達になって一緒にいろいろなことができたらいい」「私たちの国にも漁港があつて魚釣りをしている人がいます」など、現地のJICAスタッフが訳した手紙も同封されていた。これに子供たちは大喜びで、不要になった漫画や本などを換金し、プレゼントを贈ることを計画。日本の伝統文化を知ってほしいと、書道や折り紙など、子供たちが撮影した紹介ビデオを送る予定だ。黒川さんは「返事が届いたことで、子供たちは学んだことと現実が近づいた。学校には使わなくなった本などもあり、それを送って言葉の交流も行うなど両者の関係を深めていきたい」と話している。

きょうから雪まつり 今金

【今金】第二十三回いまかね雪まつり(町観光協会主催)が十八、十九の両日、町内大和町のいまかね夢広場で開かれる。雪像コンテストや花火大会、スノーボード大会、歌謡ショーなど多彩な催しが行われる。会場には町民協による岐阜城の雪像や休憩所も兼ねた奥行き十二メートルのほかに、雪像コンテストに参加する大基と一般参加の五基、ジャンボ滑り台を組み合わせた雪のステージが彩る。コンテストの表彰式は十九日午後二時半から。同広場では十八日正午のオープンとともに今金の特産野菜を使ったシチューを無料提供。午後五時からステージで七レネーが始まり、午後五時四十五分からは数量限定で日本酒の「今金」一升太郎原酒を振る舞い、午後七時四十分から狩場太鼓披露と午後八時の大花火大会が行われる。十九日は午前九時に開場、会場の向かいにスノーボード大会がオープンする。まつり終了は午後三時。その他の主な行事は次の通り。

(中村 正)



▽18日 シンシン×クイズ(午後一時)今金小児童会スペシャル企画(二時)今金高等学校と本校太鼓演奏(三時)ニコラス・アンド・パトリック無料提供(三時30分)ジャンケン大会(四時45分)「今金」コンテスト、歌謡ショー(六時)振る舞いもまき(七時)▽19日 義経大会(午前九時)雪の中ひざり競走(十一時)いも団子入無料提供(正午)杉尾聖二歌謡ショー(午後八時30分)大ピンチ大会(二時)開幕を控え急ピッチで準備中(午後八時30分)後八時30分

大学センター構想本格化

函館市と市内の大学・短大など八つの高等教育機関が二〇〇六年度、互いに連携して総合大学に匹敵する機能を発揮する「大学センター」設立を目指した取り組みを本格的にする。今日六日には連携推進協議会を発足し、〇六年度は合同公開授業など連携事業の実績を積み重ねながら単位相互交換などの検討に入る。函館の新たな高等教育の在り方を模索する動きとして注目される。(安本 晴美)

同協議会は、北大水産、本州では、近隣に大学や短大が数多く集まっている。京都市や愛知県瀬戸市など、公立大学と短大が連携して単位相互交換などを行っている。具体的事業には、学生が他校のゼミなどに参加する学生受け入れ制度など、互いに学びを深め、所

授業を拡充 単位相互交換も検討

函館市高等教育機関連携推進協議会の設立理事会。大学センター構想実現へ本格的に動き出す。と狙いを説明する。函館市内の八校は、千人を超える学生と約四百人の教員、約二百人の職員が在籍し、市の人口の二割を占める。大学センター構想の背景には、少子化の中、学生や定住人口を確保したいという関係者の思惑もある。八校と函館市は昨年、「食」をテーマとした合同公開授業開催、八校合



函館市高等教育機関連携推進協議会設立理事会
平成18年2月6日